

六条家歌人の個性、特に藤原清輔の場合

The Individual Quality of the Rokujō Poets ; with particular emphasis on the works of Fujiwara Kiyosuke

Reuben M. GERLING*

It is a common belief that poets who belonged to a poetic house preferred to use the name of an illustrious ancestor rather than their own. This idea was enhanced by the most well-known house of poetry, the Mikohidari, who preferred to use the name of Teika in their spurious treatises. Indeed, Teika himself instigated that practice when he kept on referring to his father Shunzei in his own works. Mikohidari, however, were a late comer. How did the poets of the first poetic house, the Rokujō, behave ?

Akisue, the founder of the house, and his chosen heir Akisuke left little in writing. This meant that the third head of the house, Kiyosuke, had to rely on his own work. He did, however, have access to the most important poet of the day, Minamoto Toshiyori, and to Ōe Masafusa. He thus received knowledge from inside as well as from outside the Rokujō house.

At the same time Kiyosuke was also an independent individual who held strong views about the practice of Japanese poetry. As a result,

* 長岡技術科学大学外国人教師

although we can find the influence of Toshiyori in his work, it is obvious that Kiyosuke used what he had learned and what he had gathered from independent sources to create theories of his own.

〈歌の家〉という表現を聞くと定家と御子左が特に浮かび上がるのではないのでしょうか。但し、御子左が一番有名な歌の家と知られていても、元祖ではなかったことは確実である。というのは顕季の六条藤原は日本で初めての和歌の家であったと認めなければならない。そのみならず、歌の家を作ろうとした歌人も多かったかも知れないが、成功して長く世襲したのは希であった。俊頼が父経信の跡をたどって、その子俊恵も伝統を続けようとしたが彼らは自分が〈家〉であると思ってなかったし、また俊恵の跡を継ぐ歌人もいなかった。

平安末期の歌道世界には師弟関係がまだ緩かったので、歌人達が色々な教えを受けながら自分の独立の道を求めたと言えよう。その中でも俊成は、基俊、俊頼の二人の教えを受けたと言う話が有名であろう。

六条藤家歌人の家風はどういうものであったのであろうか。例えば定家が毎月妙の冒頭に、「わづかに先人申しをき候ひし庭訓ていじんのかたはしを申し候ひき」と述べている。つまり、自分の考えや判断によって出来上がった理論ではなく、父親から受け継いだ伝統しか伝えられないという意味である。勿論、定家は謙遜し、自分の考えを低くみて、俊成を尊敬したに違いないであろう。従って、このような伝え方から彼の子孫の時に偽書の現象が起ったのではないであろうか。というのは、定家は父親の名前として理論を伝えようとしたのと同じように、後の世代の歌人達も自分の作品の名を隠し、定家の名前で出したのであろう。

猶、御子左よりも百年位早く創立された六条藤原の場合はそれと同じであったろうか。

六条藤原の歌人達の歌の家元意識は非常に強いものであった。顕季が人麿

影供歌会を開催しそれが歌の家の一つの定礎になったといえよう。また、彼は人麿影、和歌文書、破子の硯などを第三子の顕輔に譲った。つまり、顕季は歌の意味や歌のこころのことを考えず、形式にこだわり、その歌道は歌の道よりも家元の道を結成しようとしたのであろう。従って、将来の六条藤原の歌人が強い家の意識を持ちながら各自自分の個性を守って詠歌、研究などの活動を進めたのであろう。その中で、彼らが親及び目上の親族の解釈の仕方に賛成出来ないことが少なくなかった。そのような時もそのことを隠さず、自分の歌論と照らして賛成出来なかった人の名をだし、意見をはっきり表すように執筆した。従って、個人での活動が多かったので、歌の家元と認めない人もいるかも知れない。但し、その影響を考えると、やはり此の家は歌の家として成功であったと考えるべきである。つまり、影供歌合は平安末期から江戸時代にかけて歌会の形式に意味を持ち、清輔、顕昭等の歌論も歌合の式法、判、解釈に大きな意味をもたらしたに違いない。

それにもかかわらず六条の場合、創立者の文章がなかったので顕季の意見をいわゆる口伝として伝えようとした。顕季が残した口伝以外の教えは彼の歌合判詞以外は余りなかったので、その子供や孫がよその歌人の教えを受けながら自分自身の独立な道を辿った。特に、彼らに歌の道を教えたのは俊頼であった。俊頼は顕季の家庭によく出入りした歌人であったし、云うまでもなくその髓脳の著作者であった。従って顕輔や清輔に大きな影響をもたらした。それと同時に、俊頼が六条のメンバーではなかったのであるが、当時の一流の歌人であったので、清輔らは彼の意見を尊重した。

今日、私は特に清輔について話そうと思っているので、そのまえに顕昭の歌論より二、三例を挙げようと思う。

例えば袖中抄で顕昭は能宣の歌〈ゆくすえの命もしらぬ〉のこたえ歌について、まず顕輔が伝えてきた顕季の見解を引く。「女の返事ニオポロノシ水トマウセトナンイヒケルコレハオホハラヤオポロノシ水ノ歌ノ心ヲトリテイヘニケルヲコソト六条修理ノ大夫ノタマヒキトゾ 左京兆申サレシ」それから

これに対して、「但考能因歌枕云 オボロノシ水ハ山城国大原郷ニアリトイヘリ」云々と述べている。

此の例を見ると顕昭は親及び曾祖父の説に従わず、別の意見で進めている。清輔の教えに対しても彼は同じ態度をもつこともあった。例えば「ウグイスノカヒコノ中ニホトトギス」の歌について顕昭は清輔、教長二人の説明を引き、それらに対して「今案云 此兩人義如何」これを見ると顕昭は清輔と教長の名前を同列に考えていたのではないだろうか。

顕昭は特にこの二人の影響を強く受けて、二人の中で清輔は歌道家のメンバーであり先輩であったのであるが、家の外の歌人である教長の教えを強く受けたことに注目すべきである。この様に、六条家歌人は自分達のメンバーと比べて、それ以外の学者の能力が同じ程度と考えていた。それは六条藤家の一つの特徴であったと認めなければならない。清輔の場合も同じであった。まして、彼は長い年月の間、親と仲が悪かったし、親、祖父の纏めた教えも充分には受け継いでなかったと考えざるを得ない。従って、顕昭が清輔より受けた教えは同じ量を、清輔は歌道家外より受け入れたと想像できる。その歌論者が源の俊頼及び大江の匡房であった。匡房の江記が袋草紙に引用されているが、その本文は現在散逸しているために見ることが出来ない、俊頼髓脳の本文を参考に出来るので、これを先ず比較してみようと思う。結論として、清輔は各々の影響を受けたが、しかし、彼は独立した意見を持ち、結局執筆した立論が自分の考えによってであったと認めざるを得ないと思う。

清輔奥義抄と俊頼髓脳と似通った点が多いが、それを二つに分けることが出来る。一つは、歌の形、詠歌が記述されている第一巻である。例えば秀歌の一部、または歌病論等を見ると相似するところがある。しかしそれは多分、当時の歌学者として誰でも殆ど同じ議論を伝えようとしたのであろう。奥義抄の中巻及び下巻は歌詠法論でありながら清輔の研究と意見を示している作品である。その中には俊頼の影響は余り見えないが、関連のあるところを少しここで引用してみようと思う。

例として、清輔奥義抄の下巻にある古今歌解釈を挙げようと思う。全部で116首を解釈し、その中から僅かに20首が俊頼髓脳にも見られる。また、その20首の中から11首の解説が俊頼の説明に近似し、また、俊頼と全く同じ解説も見える。他の9首は殆ど関係がなく、俊頼髓脳に説明がない場合もある。

先ずその相似する例を二、三挙げてみようとおもう。

友則の「秋風に初雁がねぞ」の歌も同じ様に俊頼は、漢武帝の時代、^{こさい}胡塞の蘇武の話の説明をする。これは奥義抄、俊頼髓脳にもほぼ同じ解説がある。但し、このように完全に俊頼から引用した例が少ないので、ほとんどの議論は奥義抄にも引用し解釈を広めている。古今1013の「死での^{たむき}田長」について両方とも「時鳥の異名」であると説明し、清輔はその後話を広げて、時鳥の靴の説明もしている。古今集454、^{きめのと}紀の乳母の歌、「いささめに時まつまにぞ」について両方とも万葉のうた「いささめに思ひし物を」をひき、「いささめに」の説明をしている。ここは清輔が「かりそめ」と解説し、その後俊頼の説も挙げる。彼の結論は「おなじこころ」である。古今366「すがる鳴く秋の萩原」の歌について、清輔が俊頼と同じようにその「すがる」の説明をする上で、問題を広げて、「わかいしか」「むし」等の話を述べ、万葉の歌まで引く。

従って、奥義抄古今歌116首の中で実際に俊頼の影響を見られるところが希である。また、その奥義古今歌と古来風体抄の古今歌を比べてみると、両歌論に出ている歌が、僅かに8首しかない。清輔の承けた資料の一部は俊頼の典例であった。しかし、残りのものは別の典拠であったといえよう。また、俊成の歌論は清輔のものとは余り共通点がないので、清輔は独立した研究者として資料を収集し、別の根拠を持っていたのではないであろうか。

猶、袋草紙に俊頼髓脳引用文が15例ある。それは一つの種本として最も多いのである。その中に俊頼の原文のままを引いてあるところもある。例えば「定頼卿問う四条大納言云、式部、赤染何勝つ歌候哉」と言うところがそのひとつである。また、「おこなひのつとめて物のほしければ」と云う乞喰歌及び説明は俊頼髓脳の記事を承けていることである。これ以外もあるけれど奥

義抄の例と同じで、清輔は自分の目的を持ち、資料の必要な部分のみを引く、その使う目的が彼自身の議論を記述するためである。

結論として、清輔は俊頼の影響を受けたに違いない。その影響が奥義抄のみならず、袋草紙にもはっきりかかっている。と言っても一つの詳しい分野、奥義抄古今歌を調べてみると、やはり彼が俊頼、及びその影響を受けた俊成とはまったく別の史料を持った上で、自分の研究成果も加えたと考えねばならない。

今まで述べたのは奥義抄の一つ詳しい例であるが、歌学者清輔の研究はただ親または先達の学者から受け継いだものだけでなく、自分自身の意見によって論じたことも多かった。奥義抄の話の中には、俊頼等の前例とあまり変わらないところもあるけれど、内容においては清輔の個性を多少示すところもあったのである。

次に、袋草紙の作品構造を考えてみようと思う。作品構造をみると、奥義抄はそんなに著者の個性を表した歌論ではないが多少、面白いところもないわけではない。例えば、論議の中で問答の使い方などである。但し、清輔が自分の意見と個性を表す作品について話そうと思うと、袋草紙を挙げなければならぬ。

袋草紙は長い著作であり、項目も多い歌論であるので、それほど詳しい話が出来ない。ここでは、その構造感覚についてのみ述べる。清輔はこれをどの様に考えたか、この歌論はどのような特徴を持っているかについて話をしようと思っている。

袋草紙は項目別に色々の区分が出来る。例えば、小沢さんらの袋草紙注釈の解題は（小沢執筆）この一つである。ここに別の区分を提案したい。それは先ず、研究発表と同じ様に、清輔が研究した和歌の歴史、人麿勘文、勅撰集編集のやりかた等々のことである。その次は、褻の歌の話がある。平安末期に歌合などが多くなり、そのために題詠歌も多くなった。従って、晴の歌の論議が多かった。但し、ここでは褻の歌を論じているし、褻の歌人について

でも論じている。

研究結果及び褻の歌の立論が第一巻にある。それにたいして清輔は第二巻の全巻で晴の歌について述べている。これを次のように、もう少し細かく区分できる。歌合のしきたり、環境、判断に分ける事もできる。

玉葉嘉応4年6月6日に、

今暁、京極東勘解由小路南春日北二町焼け亡云々、法成寺頗近辺何、然而無其恐云々、以礼申関白返答云、雖參勿論、仍即帰了云々、又清輔朝臣家焼失、仍遺訪了、返答云、和歌文書一紙不焼失云々

つまり、清輔の書簡が有名であったので、家が焼けたと聴くと兼実が先ず、「和歌の文書大丈夫ですか」と伺う。其の書簡の内容が現実では確認できないが、やはり、彼の歌論の中に見える研究結果とその書簡を重ねて考察をしなければならない。其の研究成果の一部が袋草紙に現れている。特に、平安末期の歌学者がそれほど詳しい研究をしたのは注目すべきことである。

褻の歌について、清輔が非常に詳しく述べている。其の歌を記述するために彼が各首の詠まれた脈格を記している。題のみで内容が理解できる晴の歌に対して、褻の歌の場合は、其の作られた状況が解らなければ、内容も非常に分かりにくくなるはずである。たとえば、道雅の

あふさかは東路とこそききしかど心ぞくしのなにぞありけん

これだけでは歌の意味が理解しにくい。勿論、道雅と当子内親王の密通は栄華物語で知られている有名な話であるが、全く知らない歌の背景をその説明や詞書にない曖昧になる。その曖昧さをなくすために清輔袋草紙の一部を「説話」と呼ぶ時もある。其の「説話」原則があるのは、もう一つの理由がある。それは清輔が歌のみならず、歌人の人柄についても述べているからである。其の点も此の著作品の一つの特徴である。清輔は自分自身が評価したものを袋草紙に多く出したのは確かである。彼は個性的であって社会的にみると必ずしも成功した人ではなかった。従って、彼は個性のある歌人であり、言い替えれば、少し変わった歌人を尊敬したらしい。其の話は清輔が非

常に詳しく述べているのである。能因の花見の話、節信と能因の意気投合の話などがこれの例である。

晴の歌に入ると其の詠み人の個性の問題も変わるのである。歌合の場合は先ず歌柄が大切であり、余り個性の強い人は困るときもある。袋草紙で、特に能因、兼盛の話を挙げている。能因が長谷を訪れて公任に歌を見せたとき、四条大納言は能因の一首は「歌合の歌には似合わない」と言う理由で省いた。もう一首を公任が入れようとしたがこれが能因の歌と聞いた後で、歌の欠点を見つけて入れてはいけないと言ったのである。それも能因の個性のせいであるのではないだろうか。

歌論袋草紙の話をする、其の著作目的も少し考える必要がある。ほとんどの歌論は歌を教えるために書かれたのである。袋草紙の場合もそうであるかも知れないが、それ以外の目的もあったに違いない。それは晴の歌、つまり歌合等の組織者のための教本である。歌合をたてようと思った宮廷の貴族の一つの手引であったであろう。其の点でも此の作品が特徴を持っていると考えなければならないであろう。

今日は、私は六条家、特に藤原清輔についてのおおざっぱな話をしたが、結論として次の点を強調したい。

顕季は子孫に歌の家の形式的な構成を伝えたが、其の内容は彼ら各自、自分の能力によって構成し達成したものである。

その後は、各歌人は家元の先達を尊敬しながら、また、別な歌人の教えも受けて、自分の意見を発展させたのである。

清輔の世代から六条歌人が特に和歌研究に優れて、彼らの結果と結論の中には各自の意見も多く納まっているのである。

清輔の奥義抄の中に、其の独立した研究結果の一つの例もみられるのである。

袋草紙の内容と構成が当時の歌論と違って、研究結果、藁の歌と晴の歌が

納まっている歌論と云うことができるのである。また、袋草紙は歌の参考書であると同時に、歌合の組織者の手引でもあったと云うことが出来る。

討議要旨

小沢正夫氏より、次のようなコメントがあった。[『袋草紙』注釈で分類を私を書きました。その当時から構造論というものが、流行り出していたのですが、『袋草紙』の場合、そんなに秩序整然と並んでいるものではない。連想を追って、あっちに行ったりこっちに行ったりしており、いわば連歌の付合いのような所があります。構造論では解決しきれないもので、これは『俊頼髓脳』の場合も、そうです。分類・構造といえるものが現れるのは、『八雲御抄』に至ってからだと思います。そういった流れにおいて、『袋草紙』注釈の私の文章は、書いたものです。]

発表者は、自分の提出した分類は、また別の目的にたてば、こういう区分も考えられるということで出したもので、小沢氏の分類と対立するものではない、と述べられた。